

# インフラ整備と併せたソーシャルキャピタルの育成に関する研究

- 日向市における街なか再生事業を事例として -\*

Social Capital Development associated with Infrastructure Provision

-A Case of City Center Redevelopment Project in Hyuga City -\*

辻 喜彦\*\*・斎藤詩織\*\*\*・吉武哲信\*\*\*\*・出口近士\*\*\*\*\*

By Yoshihiko TSUJI\*\*・Shiori SAITO\*\*\*・Tetsunobu YOSHITAKE\*\*\*\*・Chikashi DEGUCHI\*\*\*\*\*

## 1. はじめに

近年、地域活性化やまちづくりの分野においてソーシャルキャピタル(以下、SC)への関心が高まっている<sup>1)</sup>。これは、従来、道路や鉄道、あるいは工業用地などのインフラ整備を通じて地域産業の振興や生活環境の改善を図ることが目指されてきたが、近年では、このようなインフラ整備型のアプローチだけではその目的が達成し難くなってきていることによる。例えば、衰退した中心市街地や農村の再生は、多くのインフラ整備を実施しながら、顕著な効果が上げられていないことを指摘できる。効果を上げられない理由の一つには、住民やコミュニティが整備されたインフラを十分に活用できない(活用策を生み出せない)こともあろう。したがって、インフラ整備の際には、エンドユーザーである住民やコミュニティのポテンシャルにも何らかの配慮が必要であり、この関心が、SCへの関心に繋がっていると言える<sup>2,3)</sup>。

さて、宮崎県の地方都市である日向市は、永らく中心市街地の衰退に苦しんでいた。その対策として日向市では、1996年より土地区画整理、鉄道高架、商業集積等による街なか再生プロジェクトが開始され、現在も進行中である。このプロジェクトの特筆すべき点は、1)複数のインフラ整備に対し、多様な事業主体および市民、行政、専門家グループがこのプロジェクトに関わり、「日向都市デザイン会議(以下、D会議)」がプロジェクトの全体運営にあたったこと、2) D会議は、市民は中心市街地活性化の主役であるべきとの考えから、プロジェクトにより多くの市民を巻き込み、そしてまちの課題が住民の目にみえるようにすることを主眼としたことである<sup>4)</sup>。

本稿は、この日向市街なか再生事業を事例とし、プロジェクトでの市民参加の内容を整理し<sup>5,7)</sup>、プロジェクトを通じてSCが育まれたことに関し考察するものである。

## 2. ソーシャルキャピタル構築を主眼とした市民参加

### (1) 市民参加の経緯

表-1は、日向プロジェクトにおける市民参加の機会をその目的別に分類したものである。1998年から計画を実質的に議論するD会議がスタートしたが、市民参加の機会は1999、2000、2002年の入郷地区の一般市民に向けて開かれたシンポジウムから始まっている。2002年には、富高小学校での「まちづくり課外授業」がスタートした。また、2002年以降、D会議のランチ組織である「駅前広場検討委員会(以下、委員会)」が設置され、具体的な設計に関しての市民との意見交換や試験施工チェックなど、様々な機会が設けられている。

### (2) D会議によって進められた主な活動の概要

#### a) インフラのデザインへの市民参加

D会議は、駅舎、駅前広場、街路、公園等のインフラの設計デザインに関し議論したが、さらに使いやすさの観点からのデザイン改善等を目的として、委員会において詳細デザイン設計のプロセスに市民の参加が図られた。

例えば、駅前広場における歩車道の段差については、2004年に車イス利用者と視覚障がい者の参加を得て、その望ましい段差と勾配を検討するための実験を行なっている。具体的には、数種類のサンプルを設置し、実際に体験してもらうことにより、日向オリジナルの歩車道境界縁石を決定した(図-1)。また、地区内の案内サインも、2005年に数種類の試作品を道路上に設置し、周辺住民や店主に確認してもらい、この結果に基づきデザイナーはサイン板の形状や色調を改良し、その後D会議で最終デザインを決定した。

以上のように、市民参加は、委員会委員だけではなく、一般市民や特定のグループをも対象として行なわれたことは注目すべきであろう。

#### b) 公共空間と商業地区のデザイン

商業エリアにおけるストリートファニチャー(SF)のデザインについては、D会議と「ひゅうが商業タウンマネジメント計画策定委員会(以下、TMO計画委)」で議論された。SFには、中心市街地整備のコンセプトである「木を活かしたまちづくり」実現のために杉を活用すること

\*キーワードズ：計画手法論、市民参加、ソーシャルキャピタル

\*\*学生員、宮崎大学大学院農学工学総合研究科博士課程  
(宮崎県宮崎市学園木花台西1丁目1番地、

TEL0985-58-7331、FAX0985-58-7344)

\*\*\*学生員、宮崎大学大学院工学研究科博士前期課程

\*\*\*\*正員、博(工)、宮崎大学工学部土木環境工学科

\*\*\*\*\*正員、工博、宮崎大学工学部土木環境工学科

表－1 日向プロジェクトの過程

年	事業の動き	日向市のまちづくり経緯	各委員会の検討経緯
1996			日向市駅周辺まちづくり研究会(～1997)
1997			日向市駅まちづくり委員会(～1998) 日向市特定商業集積整備基本構想策定委員会(～2003)
1998			日向都市デザイン会議(～2002) 日向市街なか魅力拠点整備検討委員会(～1999) 日向地区鉄道高架・駅舎デザイン検討委員会(～2000)
1999	日向市駅周辺土地区画整理事業事業認可	日向入郷地区都市景観シンポジウム	ひゅうが商業タウンマネジメント計画策定委員会(～2001)
2000	連続立体交差事業事業認可	日向入郷地区都市景観シンポジウム	
2001		塩見橋メンテナンスイベント	日向市駅周辺街なか交流拠点整備検討委員会(～2003) 日向市駅周辺道路設計ワーキング部会(～2002)
2002	ひゅうが10街区パティオ竣工 鉄道高架工事起工	市民シンポジウム 第1回富高小学校「まちづくり課外授業」 塩見橋メンテナンスイベント 日向入郷地区まちづくりシンポジウム	
2003	駅前8街区リーフギャラリー竣工	塩見橋メンテナンスイベント	駅前広場検討委員会(～2005)
2004		第2回富高小学校「まちづくり課外授業」 杉コンペ「杉コレクション」 歩道段差試験 塩見橋メンテナンスイベント	
2005	13街区(モビール13)竣工	案内サイン試験 塩見橋メンテナンスイベント	
2006	高架・新駅舎完成	完成前駅舎見学会 大王谷中学生「課外授業」 高架ウォーク(11月) 塩見橋メンテナンスイベント	
2007	商工会議所竣工	旧駅舎お別れイベント 地元建築士対象セミナー 第3回富高小学校「まちづくり課外授業」 塩見橋メンテナンスイベント	
2008	西駅前広場オープン	塩見橋メンテナンスイベント	

が目指されたが、杉の外構材利用には、高い耐久性が求められた。そこで、TMO計画委には「木材青壮年連合会(以下、木青会)」のメンバーが参加し、デザイナーと共に技術開発を行なった。無論、SFのために開発された技術は、杉材の更なる利用促進および日向市や近隣地区の経済に貢献することが期待されている。

次に、商業エリアにおける店舗配置や個店の設計については、主にTMO計画委と商店主の組合で議論された。この際、地元建築士は、街なかの店舗や住宅を実際に設計する都市デザインと地域活性化を具現化する役割を担う非常に重要な存在であるとの認識から、D会議が、地元の建築士と施主と共に、駅周辺の商業ブロックと新しい建物にとって望ましい都市デザインに関する議論を試みた。しかし、これは施主の反対により十分な成果は得られなかった。この失敗の後、再度、D会議メンバーの内藤氏らが中心となり、2007年に地元若手建築士を対象とした街なかの建築デザインに関するワークショップを4回開催し、その重要性を彼らに伝えている。

### c) まちづくり意識の啓発とまちづくり学習

日向プロジェクトの初期段階の重要課題は、市の活性化のためのプロジェクト目標を市民に理解してもらい、その進捗状況をいかに伝えていくのかであり、このことから、市民向けのシンポジウムが多く企画・実施された。具体的には「都市景観と鉄道施設のデザイン」(1999年11月)、「木を活かした街づくり」(2000年11月)、「新しい世紀の日向市の風景」(2002年3月)、「ひとりひとりの挑戦～思いはかなう～」(同年11月)のテーマでシンポジウムが実施された。シンポジウムでは、D会議委員の基調講演の後、パネルディスカッション、聴衆との質疑応答が



図－1 歩道の段差試験



図－2 小学生が設計した杉屋台

なされた。年ごとに参加者層は異なったが、毎回多くの市民の参加を得ている。

市民参加のためのもう一つの取り組みは、次代のまちづくりを担う子ども達にまちづくりへの関心を高めてもらうことを目的として実施された「まちづくり課外授業」である。地元富高小学校6年生を対象としたこの授業は2002年に始まり、2004、2007年にも開催された。特に2004

年の授業は大きな反響を得た。授業内容は、1)市担当者からの日向プロジェクトに関する説明、杉山と木材処理工場の見学、および街なかの調査、2)市の中心部で使われる杉屋台(移動式夢空間)をデザインするワークショップ(WS)である。WSは、D会議メンバーでもあるSFデザイナーが主体となり指導した。また、WSで児童らが作成したデザイン図は、SF製作に携わった木青会メンバーの協力で実物が製作され、完成後、3台の屋台は市へ寄贈された。これらは現在、中心市街地で催される祭りやイベント等で活用されている。なお、学校・デザイナー・行政・市民が一体となったこの授業プロセスと作品は、2005年10月にグッドデザイン賞を受賞し、授業の様子はメディアを通じて幅広く市民、県民、全国へと伝えられた(図-2)。

#### d) イベント・祭り

D会議と県・市は、シンポジウムに加えて、イベントを市民の理解を得るための好機と考え、事業進捗に合わせて毎年、様々なイベントを企画・開催してきた。

例えば、新しい駅舎の大屋根となる木材工場での部材加工工程や新駅建設工事現場等を見学する「駅舎見学ツアー(2006年6月)」には、市民160名が参加した。また2006年の11月には、完成した鉄道高架橋を歩く「高架ウォーク」が開催され、約1,000人の市民が参加しており、回を重ねるごとにリピート参加者も増えている。

この他、駅のSFデザインコンペ「杉コレクション」が2004年に開催されている。このイベントは杉の活用の可能性を探るために、県・市の協力のもと木青会が開催したもので、全国から60作品ものデザイン応募があった。本コンペの特徴は、最終選考に残った参加者の作品が木青会メンバーによって、実寸大で試作されることである。コンペの狙いは、杉材利用の新たな提案を実現することで技術向上を図ること、コンペに関わる人々のネットワークを地域や業界を越えて広げること等であった。

なお、最終選考イベントは、十街区パティオで行なわれ、約300人の市民が参加し、優勝作品のベンチは現在、駅プラットフォームに設置され市民に利用されている。

### 3. ソーシャルキャピタルから見たプロジェクトの評価

#### (1) 市民の主導によるイベント・祭りの展開

前章で示したシンポジウムや見学ツアー等を契機として、市民発意によるイベントや祭りも多く生まれている。表-2に2006年から中心市街地で行なわれたイベント・祭りの集客数を示す。多くのイベント・祭りが民間主導で開催されていることは明らかであり、集客数も増加している。大きな集客力を持つイベント・祭りを民間主導で実施できるようになったことは、新たに整備された環境や空間をうまく活用できる民間のネットワーク(SC)が育ってきたことを意味すると言えよう。

表-2 イベント・祭りの集客数

年	月	日	イベント名	推定集客数
2003	6-7		土曜夜市	400
	7	11	中里村交流イベント	500
	9	13-14	日向十五夜祭り	2,500
2003年集計				3,400
2004	1		商店街招福餅まき	250
	6-7		土曜夜市	500
	9	18-19	日向十五夜祭り	3,000
	10	30	ハロウィン	100
	11	13	土木の日フェスティバル	2,000
	11	13	杉コレクション	300
	12	24	クリスマスイベント	200
2004年集計				6,350
2005	1	22	スペシャルオリンピック	250
	2	6	ゴールデンゴールズ歓迎式典	3,000
	6-7		土曜夜市	1,200
	6	25	七夕祭り	1,000
	8	6	日向ひよっこ夏祭り	3,000
	9	17-18	日向十五夜祭り	3,000
	10	29	街なかハロウィン	200
	11	11-13	周年事業イベント	600
	12	17	ブラックイルミネーション	300
2005年集計				12,550
2006	2	16	ゴールデンゴールズ歓迎式典	1,500
	6-7		土曜夜市	1,500
	7	1	七夕祭り	1,100
	9	9-10	日向十五夜祭り	4,000
	8	5	日向ひよっこ夏祭り	3,000
	10	28	ハロウィン	1,000
	12	17	新駅開業を祝う市民イベント	15,000
2006年集計				27,100



図-3 子どもまち育て隊による清掃活動

#### (2) ソーシャルキャピタル発展の評価

##### a) 店主の組合

前節のイベント・祭りにも含まれているが、店主組合は、伝統行事(十五夜祭、ひよっこ祭等)や野球チームのキャンプ歓迎式典等を開催してきた(表-2参照)。実際、イベント・祭り回数及び集客数は、十街区が竣工した2004年以降増加しており、店主が、整備された街の空間を積極的に活用し始めたと言える。さらに、これらのイベント・祭りの集客数の増加は、年間を通じたイベント・祭り相互の開催連携の可能性を示している。

なお、最も象徴的なイベントは、2006年に参加者15,000人を集めて開催された新駅舎と駅前広場のオープニングイベントである。公式式典は県・市が執り行なったが、その他の催し物は、店主組合、NPOや他の市民団体等による市民発意によって開催された。市民団体リーダー

の一部は、委員会のメンバーであることから、本プロジェクトへの参加が、街なかでのSC発展の契機になったと推察できる。

#### b) ボランティア団体の新たな出現

2005年には、14人の商店主と中心市街地在住の市民で構成される「街を育てる会(まち育て隊)」が結成され、イベント・祭りを企画・参画、市民意見の収集等の活動を行なっている(図-3)。さらに2007年には、10～15歳の11人で構成される「子どもまち育て隊」が結成され、街なかハロウィンの運営や、2ヶ月ごとの駅周辺の清掃活動、中心市街地でのイベント・祭りへの参加を行なっている。このような活動が自主的に現われてきたことは、市民の「街への愛着」が育ってきたことを意味しよう。

#### c) 地元建築士会

先述の内藤氏による建築ワークショップの後、若手建築士4人は自主的に都市デザインと建築の関係を勉強するグループを結成し、商業地区のまちづくりコンセプト「溜まりの5原則」を提言している。さらに、2007年11月、彼らは、内藤氏らによる駅東口の市営駐車場管理棟の設計作業に参加して都市デザインの面からの設計手法や杉の活用工法を学び、2008年4月からは「溜まりの5原則」に基づいた建築設計ルールを提案したところである。これは、建築士グループが、街区の都市デザインのあり方を、具体的な建築設計を通じて提言する初めての行動であり、大いに評価すべき点である。建築士間のネットワークの形成と強化はSCの観点からも評価できよう。

#### d) 木材団体・木青会

日向プロジェクトの目標は「木を活かしたまちづくり」であることから、木青会は、本プロジェクトに様々な形で参画している。SFデザインや課外授業の過程では、木育会・教師・市民・行政・デザイナー間のネットワークが形成され、この連携がその後の課外授業、イベント・祭りで非常に重要な役割を果たすようになっていく。すなわち、ここでは異業種・異分野に渡るSCが形成されてきたと言える。また彼らは、「メンテナンスイベント」として市民と子どもたちを巻き込み、杉材SFの定期的な清掃活動を約7年間継続している。このメンテナンスを通じて一般市民に、SCと深く関連する街に対する愛着が生まれ、継承されていくことが期待されている。

なお、木青会は日向市で開催された杉コレクションの後、宮崎市(2005年)、都城市(2007年)で、県からの助成を受けて、本コンペを継続開催している。木青会メンバーは、イベント計画段階から実施に至るまで重要な役割を果たし、また、現在では、日南市の運河再生事業をはじめとした多くのプロジェクトで、まちづくりや杉利用に関し支援をしている。日向市で育ったSCが全県的な広がりを見せていると言える。

#### f) 日向市におけるソーシャルキャピタル構築

上述の事実に着目すると、人の繋がり、地域や所属団体等の枠を越えて広がり、強くなっていると言える。木青会に代表される市民グループのネットワークは、徐々に自立し自主的に活動するようになった。日向プロジェクトを通じて、SCが広がり、強化されたことによって、日向プロジェクトの目標が現実的なものになっている。

## 5. 結論

本研究は、日向市の事例をもとに、大規模なインフラ整備に伴いSCが育まれてきたことについて述べた。この観点からみたプロジェクトの主な特徴と形成されたSCの特徴は次に示す通りである

1) 一般市民に向けたシンポジウム/イベントや身障者、NPO、専門家、技術者等の参加による設計プロセス、小学生へのまちづくり課外授業、地元建築士や商店主に向けたWSなどによって、D会議はあらゆる場面で多くの市民を巻き込む機会を創り出してきた。

2) このような機会を通じて、新たな集団・組織が結成された。その一つである「まち育て隊」と「子どもまち育て隊」は、イベント・祭りの企画・開催や定期的な清掃など自主的な活動を展開している。建築士グループは中心市街地における建築ルールを提案した。木青会は、課外授業やイベント・祭りに際して広範囲の地域で、まちづくりをサポートするようになった。

3) これらの集団・組織は、SCの文脈で評価できる。すなわち、日向プロジェクトはSCの形成・発展を実現したと言えよう。

以上を踏まえれば、インフラ整備事業に伴うSCの形成・発展は有効であることが示唆される。ただし、本稿は、SC発展の現象を示したものであり、日向プロジェクトとSCとの間の因果関係を厳密に分析したものではない。その意味では、プロジェクトと自主的な活動をしている市民についてのより詳細な調査が必要であろう。また、課外授業やまち育て隊に参加した子どもたちに関しては、彼らのSCについて考察するには時期尚早であり、継続的かつ長期的な調査を行なうことが必要である。

#### 参考文献

- 1) 大阪大学 NPO 研究情報センター:日本のソーシャルキャピタル, 2005.
- 2) 国土交通省都市・地域整備局都市計画課:国土交通省所管公共事業における景観検討の基本方針(案), 2007.
- 3) 新谷大輔:産業集積とソーシャル・キャピタル,  
<http://www.geocities.jp/das720/research/paper/shuseki0503.pdf>
- 4) 篠原修:土木デザインの現在+コラボレーション, 建築画報特別号, No39, 2003.
- 5) 宮崎県・日向市・アトリエ74:市民・行政・専門家による駅を中心としたまちづくり, 土木学会誌, Vol.92-3, pp.6-7, 2007.
- 6) 日向地区都市デザイン会議:市民・行政・専門家の協働による駅を中心としたまちづくり, (財)udc, 2007.
- 7) 宮崎県土木整備部日向土木事務所:日向地区都市デザイン会議報告書, 2007.